

2月10日
第1回一般入試

2020年度
入学試験問題

国語

【注意事項】

1. 試験時間は50分です。
2. 問題は1ページから13ページまであります。
3. 解答はすべて解答用紙に記入してください。
4. 問題用紙と解答用紙に受験番号、氏名を記入してください。
5. 記述は句読点や記号も字数に数えます。

受験 番号						氏名	
----------	--	--	--	--	--	----	--

宝仙学園高等学校共学部 理数インター

1

次の各文の——を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 戸籍抄本を取り寄せた。
- (2) 世界的な音楽家に憧憬する。
- (3) 世の中の移り変わりを諦観する。
- (4) 蔑むような目つきをたしなめる。
- (5) 政治に身を委ねる。

2

次の各文の——を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 彼の姿勢にケイフクする。
- (2) コクモツを輸入する。
- (3) 事態のシュウシュウがつかない。
- (4) イバシヨを探す。
- (5) 彼は多くの可能性をヒめている。

3

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。(＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。)

高校二年生の春^{はる}乃は、華道同好会ただ一人の会員である。華道の全国大会「全国高校生花いけバトル」に出たいのだが、二人組でないと出場できない。春乃は友達や知り合いに出場を交渉するが、誰一人承諾してくれず、落ち込んでいた。そんな時、転校生で大衆演劇の人気役者でもある貴音^{たかね}に華道の心得があると知る。仕事柄勉強が遅れがちな貴音に春乃が勉強を教え、その代わりに貴音と一緒に大会に出るといふ話がまとまった。

翌々日の木曜日、最後のホームルームが少し長引き、春乃は駆け足で中庭に向かった。自分がいなければ、貴音は勝手に帰ってしまうかもしれないと思つたのだ。プレハブの入口は死角になっており、回り込まねばならない。角を曲がった時、目の前に貴音がプレハブにもたれ掛かって座っていた。

「あ……」

「おう。遅かったな。どうした？ 驚いた顔して」

貴音は猫を思わせるような、しなやかな伸びをして立ち上がる。

「ホームルーム長引いたから。私が来ないなら帰っちゃるかと思つて……」

「何だよ。約束だろ」

貴音はさも当然とばかりに言った。家族に怒っておきながら、自分こそ貴音に勝手なイメージを抱いていたことを恥じる。

「ごめん。急に来れない時とか、連絡どうする？」

春乃はプレハブの鍵を差し込んで回した。

「後でメール教えるわ」

貴音は大きな欠伸あくびをしながら待っていたが、鍵を開けるや否やいな、すぐに戸を開けて中へ入った。

「ねえ、何でスマホじゃないの？」

「何でって、何で？」

貴音は振り返ることもなく、奥へと進んで鞆かばを置いた。

「今なんてみんなスマホじゃん。アプリ使ったほうが、連絡も早いし、楽だし……」

「そんな頻繁に連絡取る相手なんていねえから」

貴音は微かに笑った。その横顔はどこか哀かなしそうで、自嘲的なものと思えた。

「そっか」

歯切れの悪い返事になってしまったからか、貴音は氣を使ったらしく言葉を重ねた。

「転校ばかりだろう。その場、その場では友達も出来るし、引越しても最初の頃は連絡も取るけど、いつの間にかしなくなっちゃうからな。人ってのはやっぱり、同じところに根を下ろしている人同士で固まるもんなんだよ。ましてや高校生なんだからな」

貴音は妙に大人びたことを言った。確かに言う通りかもしれない。⁽¹⁾ 小學生の頃、クラス全員に慕われていた希恵きえという女の子がいた。髪を掻き上げる仕草が大人びていて素敵だった。希恵は五年の二学期に静岡に転校することになり、春乃も含めてクラスの皆は、

——絶対忘れないからね。離れても友達だから。春休みにはみんな

集まって遊ぼう。

などと、口々に声を掛けていた。

別に忘れた訳ではない。友達でなくなった訳でもない。春休みもちよつと予定が合わなかっただけだったと思う。だけど繰り返される日常は、徐々に希恵のことを想おもう時間を削っていった。卒業の時には誰一人として口に出さなかったのがその証拠だろう。

では希恵は裏切られたのか。不幸せだったのか。それは違うと思う。

希恵もまた新たな場所に根を下ろし、新たな友達が出来、春乃たちを想う時間が自然と減っていったのだ。

それは小学生の話だが、高校生でもさして変わらないだろう。放課後にプリクラを撮りに行き、ジュース一杯で何時間もお喋りしゃべりし、毎日アプリで連絡を取り、ニコイチ、親友などと言いつつ友達ともし遠く離れたとしたら、そのうち何組が大人になるまで友人としていられるか。少なくとも春乃には自信がなかった。

貴音にとってはそれが当たり前前で、別れこそが日常なのだ。そんなことを考えていると、貴音が目の前で手を振った。

「どした？」

「いや……大変だったんだなって」

考えていたことを話すと、貴音は口元を綻ほころばせた。

「生まれた時からそうだからな。慣れた。ただすぐに転校だから、人に借りは作りたくない性分になっちゃった」

「だから……」

貴音が何故なぜ、花いけバトルに出ることを引き受けてくれたのか、ようやく

くわかった。

「春乃は勉強を教える。俺は一緒に出る。これで貸し借り無しだ」

胸の奥が急に痛くなった。お前ではなく、唐突に名を呼ばれたからかもしれない。いや、そうではない。貸し借り無しという言葉が妙に胸に突き刺さった。

「何で呼び捨てなのよ」

別に呼ばれても構わない。他にもそう呼ぶ男子は何人かいる。⁽³⁾だが今の感情をごまかそうとしたら、その台詞が飛び出してきた。

「まずかったか？　じゃあ、春乃ちゃん」

「気持ち悪い。春乃でいい」

「そっか。俺も貴音でいいぜ」

「うん……わかった」

春乃はこくりと頷く。それと同時に貴音はぱんと手を叩いて、プレハブの中を見回した。

「さて、今日は何をすればいいんだ？」

「予算が無くて、滅多にお花を用意出来ないんだけど……」

そう言っただけで春乃は奥に置いたバケツを取って来た。水を張った中には少量の花が入っている。

学校の近くに「フラワーレイ」という、長岡先生から紹介してもらった夫婦で営んでいる花屋がある。同好会には雀の涙ほどの予算しかないが、昨年文化祭で作品を展示することになり、訪ねたのが最初であった。たまにそこで売り物にならない花を貰ってくる。あまり頻繁では気が引けるので遠慮しているが、今日は貴音が初めてということもあってお願いした。

「二人分はあるから、いけてみる？」

「やってみるか」

各々が好きな花器を選び、同時に花をいけ始めた。

「いつぶり？」

春乃は鉢を動かしながら訊いた。

「うーん……小学校四、五年以来かな」

「そっか。じゃあ随分久しぶりね」

貴音はバケツの水に浸したまま鉢で茎を切る。しっかりと水切りを知っているあたり、やはり未経験者ではない。

「これを5分でやるんだよね」

「そう。大量の花材の中から選んでね」

「イメージが湧かねえなあ」

「そうそう。あれを借りて来たから」

春乃は手を動かしつつ視線を机にやった。そこにポータブルDVDプレーヤーが置いてある。

「DVD？」

「うん。去年の大会を見て貰おうと思って。それが一番雰囲気を感じると思うし」

「なるほど。わかった。よし、完成」

「わっ、早いね」

貴音はすでにいけ終えた。しかも中々に纏まりがいい。春乃が思った以上の腕であった。

「俺の勝ちだな」

「早さはね。まだ5分には時間がある」

春乃は次々に花をいけていく。最後に取ったのは白い宿根スィートピーで、まるで白が溶けだしたかのような、透き通った甘い香りがした。目を瞑って鼻先に近づけ、思い切り息を吸い込む。花はその彩りだけでなく、匂いでも人の心を弾ませてくれる。

そっと目を開けていけようとした時、貴音がじつとこちらを見つめているのに気が付いた。

「どしたの？」

「いや……何でもない」

「もう終わるから……はい。完成」

⁽⁴⁾ 春乃はすうと花器に宿根スィートピーを差し入れた。

「どう？」

春乃は恐る恐る訊いた。

「うん。いいと思う」

「適當。私も貴音の好きだよ」

「そっか。久しぶりの割には出来た」

「じゃあDVD見ようか。西日になると見にくいから電気消すね」

照明の灯りを落とすと、部屋の中は薄暗くなる。とはいえ顔が見えなくなるほどではない。

二人並んで机に向かって座った。DVDは別に今回のために用意した訳ではない。パートナーを誘うにあたり見せたいと思い、事務局に問い合わせたら丁寧に送ってきてくれたのだ。

「ポップコーンが欲しいな」

DVDを読み込んでいる途中、貴音は悪戯っぽく笑った。

「映画とか行くんだ」

「行く。勉強にもなるからな」

「あ、俳優の？」

「そうそう」

「貴音のこの公演は食べ物売ってないの？」

「うちは巡業メインだから。会館やホールは飲食禁止。たまにOKのところがあつて、そんな時は幕の内弁当。古臭いだろ？」

「いいじゃん、幕の内。私は好き。あ、始まる」

もう何十回も見したが、何度見ても春乃はモニターに釘付けである。音楽が流れ始める。DVDのオープニングはプロモーションビデオのようになっているのである。そこでふと気付いたが、先ほどのように貴音は頬杖をついて、モニターではなく春乃のほうを見ているのだ。

「何？ 見てよ」

「おう」

貴音は素直に机から肘を浮かせ、モニターに視線を移した。二人して流れる映像を見ると、春乃の脳裏に何故か先ほどの貴音の哀しげな笑顔が蘇った。

「貴音」

「何……だよ」

「友達になってあげてもいいよ」

「遠慮しとく」

即座に貴音は返した。⁽⁵⁾ しかし悪い気はしなかった。薄暗い部屋の中、モ

ニターの光に照らされた貴音の頬が緩んでいたのだ。冗談のつもりらしい。春乃は囁くよりも小さく息を漏らし、その横顔からモニターへ視線を戻した。

(今村翔吾「ひやつか! 全国高校生花いけバトル」による)

〔注〕 ニコイチ——ここでは、仲の良さを意味する、若者言葉。

花器——華道で、花瓶など花をいける器のこと。花いけ、花入れなどともいい、材質や形状はさまざまである。

宿根スイートピー——一年草である通常のスイートピーと異なる、ヨーロッパ原産のマメ科の多年草。蝶のような形の花を咲かせる。

〔問1〕⁽¹⁾ 小学生の頃、クラス全員に慕われていた希恵という女の子がいたとあるが、春乃が希恵について考えたわけとして最も適切なのは次のうちではどれか。

ア 同じところに根を下ろしている人同士で固まるのが人だと話す貴音の言葉によって、転校してから疎遠になってしまった希恵のことを思い出し、なつかしさを感じたから。

イ クラス全員に慕われていて、転校する際には皆から声を掛けられていたにもかかわらず、裏切られる結果となった希恵の姿が貴音の日常と重なるように思ったから。

ウ 転校して友達と遠く離れたら連絡を取らなくなるという貴音の言葉から、小学生のときに転校して互いに相手を想う時間が減っていった希恵のことが思い当たったから。

エ その場で出来た友達も引越したら連絡は取らなくなると貴音が言ったことで、小学生のときに転校した希恵に連絡を取っていないことを思い出し、罪悪感を抱いたから。

〔問2〕⁽²⁾ 慣れたとあるが、貴音は何に慣れたと言ったのか。五十字以内で書け。

〔問3〕⁽³⁾ だが今の感情をごまかそうとしたら、その台詞が飛び出てきたとあるが、春乃の「今の感情」について四十字以内で説明せよ。

〔問4〕⁽⁴⁾ 春乃はすうと花器に宿根スイートピーを差し入れた。とあるが、この表現について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 貴音に見られていることで集中力を欠いてしまい、花をいける動作を打ち切ろうとしている春乃の様子を、無機質な文によって表現している。

イ 貴音のそっけない動作をまねる春乃の様子を通して、色や香りを認識したうえで花をいけるべきだという春乃の批判的な思いを表現している。

ウ 花をいけるまでに会話を交わす中で近づきつつある貴音と春乃の心の距離を、春乃が貴音の心に花をいけるという比喻によって表現している。

エ 短い時間の中、自身の感覚で花の特徴を十分とらえた春乃が、迷うことなく自然に花をいける様子を、擬態語を用いて印象的に表現している。

〔問5〕⁽⁵⁾ しかし悪い気はしなかった。とあるが、このときの春乃の様子に最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 哀しげな笑顔が思い浮かんで心配になり、貴音の様子を測ろうと思ったところ、即座に冗談でかわされたことによりそれまでの緊迫感がなくなっている。

イ 友達になれるかどうか春乃自身の気持ちをはっきりしない中、哀しげな笑顔が蘇って思わず言ってしまった言葉だと、貴音は見抜いていると思っている。

ウ 頻繁に連絡を取る相手がいないことに対する寂しさを感じていそうな貴音の心に寄り添おうとしたところ、拒絶されてはいないと感じてほっとしている。

エ 春乃と友達になりたいという貴音の思いをくんであげることができたように感じ、自分の発言は哀しげだった貴音をいやせたのだと誇らしくなっている。

4

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに「注」がある。）

*
フィレンツェの五十キロほど南に、シエナという街がある。中世には、教皇派のフィレンツェときそいあった、皇帝派の都市である。⁽¹⁾ この市役

所、パラッツォ・プブリコは、一四世紀のなかごろに竣工した。^{*}パラッツォ・ベッキオよりはやや新しい、南北朝時代の遺構である。（第一段）

そして、ここでも施設は、現役の市役所として活用されている。建物が古び、つかい勝手も悪くなってきた。しかし、だからといって、このさい新しい庁舎にかえようと、こちらの人びとは考えない。それよりも、古い建築をたもちつづけることに、つとめようとする。（第二段）

フィレンツェに、話をもどそう。さきほど、パラッツォ・ベッキオを一四世紀の建物だと書いた。しかし、市中には、もっと古い建築が、たくさんある。教会堂にしばれば、一一世紀から一二世紀にかけてのものも、なくはない。文字どおりの歴史都市であると、かみしめる。（第三段）

フィレンツェ市は、日本の京都市と姉妹都市の協定をむすんでいる。同じ歴史都市であるということから、日本では京都が相手にうかんだのだろうか。（第四段）

だが、今の京都は、ヨーロッパの基準でながめるかぎり、現代都市である。（第五段）

⁽²⁾なるほど、京都は「千年の都」であることをほこってきた。このあいだの戦争が応仁の乱になる街だと、その悠長さも、よくはやされる。日本では、歴史の情緒をいちばんとどめる街だと、みなされてきた。（第六段）
だが、京都の洛中に、応仁の乱より古くからのこされてきた遺構は、

ひとつしかない。上京区の千本釈迦堂（大報恩寺）本堂のみである。一三世紀前半の建築で、堂内の柱には応仁の乱でできた刀傷がついているという。たしかに、あの乱をこのあいだの戦争だと言える例外的な寺院である。（第七段）

しかし、これ以外に一五世紀の乱より古い建物は、見あたらない。まあ、洛外にまで目をむければ、十数棟ほどみつかるが。（第八段）

いずれにせよ、市中の目抜き通りにならぶのは、おおむね鉄筋コンクリートのビルである。二〇世紀後半以後の現代建築が、街頭をうめつくす。（第九段）

フィレンツェでは、ほとんどの市中建築が石造やレンガ造のもので、しめられる。鉄筋コンクリート造は、ファシズム時代の例外的な建築にしか見られない。都市景観が歴史性をしのばせる度合いでは、京都を圧倒的に凌駕する。ダンテやマキアベリが歩いていた時代の景観を、とどめる区画もある。（第十段）

この街を、京都なみの(3)という粹でくくる人びとに、私は違和感をいだく。いっしょにするのは、フィレンツェにたいして失礼だと、若いころから思ってきた。ここにも、その感想を書きつけた。（第十一段）

こういうことを口にすると、かならずかえされる反論がある。日本の建築は、そもそも木でたてられてきた。耐久力では、石やレンガにおよばない。どうしても、ひんぱんにたてかえをしなければならなくなる。その差が、たとえばフィレンツェと京都のちがいを、もたらしたのではないかと。（第十二段）

たしかに、そのとおりである。木は火に弱いし、石などくらべればく

ちるのもはやい。古い建物をたちつづけようとする努力も、なかなかみのらせづらからう。（第十三段）

ただ、そんな日本でも、二〇世紀には公共建築の素材が、不燃化された。県庁舎なども、たいてい石やレンガでたてられるようになっていた。だが、二〇世紀初頭の庁舎を今でもつかいつづけている自治体は、ほとんどない。たいていの庁舎は、今日、三代目、あるいは四代目の新しい建築になっている。その平均寿命は、百年におよぶまい。せいぜい、数十年といったところか。（第十四段）

フィレンツェ市が、庁舎として利用している建物には、築七百年の物件もある。シエナ市の中心庁舎は、築六百七十年以上になる。こういう話を聞かされた時、日本の自治体関係者は、どう思うのだろう。（第十五段）

つかいにくそうな建物は、はやくたてかえればいいのに。何が良くて、そんなおんぼろを後生大事にかかえているのだろう。あいつら、馬鹿じゃあないのかと、思いかねないような気がする。（第十六段）

京都は、日本だと、環境の保全に熱心な都市だと考えられている。さきほどのべたが、フィレンツェとも姉妹都市としてのつきあいを、維持してきた。（第十七段）

しかし、そんな京都の市役所が、一九三一年にできた庁舎で、悲鳴をあげている。手ぜまになり、不便なので、このさいたてかえたい、と。以前から、折にふれ改築の観測気球を、あげてきた。最近も、壁がガラスばりになった増床案を、庁舎脇の掲示板でしめしている。（第十八段）

(4) 木造だから、建築のスクラップ・アンド・ビルドにはずみがつくのだとは、言いきれない。石造、レンガ造、あるいは鉄筋コンクリート造になっ

ても、事態はかわらなかつた。たててはこわし、また新しくたてていくという現象が、今でもくりかえされている。(第十九段)

京都では、応仁の乱がこのあいだの戦争として、しばしばことあげされる。さきほど、私はそう書いた。こういう一口噺ひくちまはなしがささやかれる背景には、まだ紹介していないべつの事情もある。(第二十段)

日本のおもだつた都市は、第二次大戦で、米軍の空襲をうけた。それで、多くの街は、一九四五年の敗戦をむかえ、焦土と化している。焼け跡に、ぼつりぼつりとビルの残骸をとどめるような惨状を、余儀なくされた。(第二十一段)

京都に空爆が、まったくなかつたわけではない。洛中でも、いくつかは爆弾がおとされたと、聞かされる。それでも、ほかの大都市とくらべれば、被害ははるかに小さかつた。だから、あの戦争で街が焼かれたという想いを、京都市人は他都市の人びとほどいだかない。(第二十二段)

いつぼう、応仁の乱は洛中を焼きつくした。戦災という点では、第二次大戦よりひどい災禍を、市中にもたらしている。このあいだの戦争としては、おのずと一五世紀におこつた内乱のほうが浮上しやすくなる。⁽⁵⁾ 応仁の乱が、戦争をめぐる語りのなかで特権化されていく。その理由は、以上のように説明しうるだろう。(第二十三段)

(井上章一「日本の醜さについて」による)

〔注〕 フィレンツェ——イタリヤ中部にある都市で、中心部には「歴史地区」がある。

パラッツォ・ベッキオ——フィレンツェにある宮殿の名。一四

世紀初め頃に建てられた。

観測気球——世論や相手の反応などを探るために、わざと流す情報や声明。

スクラップ・アンド・ビルド——古くなった物やしきみは全体を壊して一から作り直して効率化するという考え方。

〔問1〕⁽¹⁾ この市役所、パラッツォ・プブリコは、一四世紀のなかごろに竣工した。とあるが、筆者は「パラッツォ・プブリコ」をどのようなものとしてとらえているか。六十字以内で書け。

〔問2〕⁽²⁾ なるほど、京都は「千年の都」であることをほこってきた。と筆者が述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 第五段の「京都は：現代都市である」という内容を、読者に印象づけるため、一般的によく用いられるような表現をとり、その内容に納得している人がいることを述べようと考えたから。

イ 第五段の「京都は：現代都市である」という内容が、読者には意味が理解しにくいと思われるため、具体的な例を挙げることによつて、読者の理解を促そうと考えたから。

ウ 第五段の「京都は：現代都市である」という内容を、誤つた考え方として打ち消すため、読者が常識として持っている認識を述べて、否定の根拠を明らかに示そうと考えたから。

エ 第五段の「京都は：現代都市である」という内容が、読者には意外な見解であるため、読者が一般的に持っていると思われる認識に寄り添いながら、理解を助けようと考えたから。

〔問3〕 (3) に入る最も適切な言葉を、本文中から四字で抜き出して書け。

〔問4〕 ⁽⁴⁾ 木造だから、建築のスクラップ・アンド・ビルドにはずみがつくのだとは、言いきれない。とあるが、この理由として適切でないものは、次のうちではどれか。

ア 日本の建築が木造から鉄筋コンクリート造に変化した現代でも、建物をたててはこわし、また新しくたてていくという現象にかわりはないから。

イ 京都の上京区に現存する千本釈迦堂本堂は、石造りではなく木造であるからこそ一三世紀から今まで残っているという事実があるから。

ウ 京都においてさえ、不燃化された素材を用いてたてられたはずの、一九三一年にできた市役所を、たてかえようと模索している事実があるから。

エ 日本では、公共建築の素材が不燃化されて木造ではなくなった二〇世紀に入っても、それらの建物の平均寿命が数十年程度にとどまっているから。

〔問5〕 ⁽⁵⁾ 応仁の乱が、戦争をめぐる語りのなかで特権化されていく。とあるが、その理由を**五十文字以内**で説明せよ。

〔問6〕 本文の内容と論の進め方に合致するものとして最も適切なものは次のうちではどれか。

ア フィレンツェを例として歴史都市を構成する要素を具体的に挙げたうえで、同様に歴史の情緒をとどめる日本の都市として京都を示し、ヨーロッパと日本における歴史都市の定義づけの違いを明らかにしている。

イ フィレンツェのたどった歴史に触れながら、歴史都市としての景観を印象つけたうえで、京都が歴史都市となるためには建築素材の耐久性などの問題点があると指摘している。

ウ 姉妹都市であるフィレンツェの様子について説明したうえで、京都が同じように歴史都市として認識される現状への疑問を提示しながら、建築素材や戦争を巡る背景を示すことにより違和感の解消に努めている。

エ 歴史都市としてのフィレンツェのありかたと、それを支える人びとの意識を示したうえで、同列に語られる京都の実情やその背景をフィレンツェと比較しつつ説明し、京都は歴史都市にはなりえないと述べている。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。(＊印の付いている言葉には、本文のあとに「注」がある。)

＊定子の父の関白藤原道隆は容姿の美しい人だったようです。『大鏡』には、四十三歳で亡くなる直前の道隆の姿を目にした源俊賢が、「病づきてしもこそかたちはいるべかりけれ(病気にかかった時こそ、美貌は必要なものだったよ)」と言ったと記されています。

その道隆の血を引いた定子の兄の伊周も少しふくやかな体格だったようですが、見栄えは悪くありませんでした。清少納言の宮仕え第二日目に登場した彼は、上下紫の直衣姿が雪景色の中にくっきりと映えて、「いみじうをかし(とてもすてきだ)」と書かれています。

当時は台風や雷雨など天候に異変が起こった後には、荒天見舞いの殿上人が後宮を訪問します。邸のどこかが壊れたり、通り道に支障が生じたり、何か不都合はないかを確認するためでもありました。伊周も妹中宮の積雪見舞いに訪れたのですが、そこで二人の間に交わされた、和歌を踏まえた応酬は、几帳の後ろからのぞいていた清少納言を瞠目させます。

物語にいみじう口にまかせて言ひたるに、たがはざめりとおぼゆ。

(二七七段)

物語でどこまでも口から出任せに言っている理想的な情景と、少しも違わないようだと思われまます。

日常会話で和歌を交えて応酬するなど、物語の世界だけの話だと思っていたのに、それが、現実に目前で行われているのです。さらに、この時の定子の姿を描写した後は、次のように記されます。

絵にかきたるをこそ、かかる事は見しに、うつつにはまだ知らぬを、夢の心地ぞする。

(二七七段)

絵に描いてあるものではこのような場面は見ましたが、現実世界ではまだ知らないの、夢のような気持ちがあります。

物語や絵のような現実離れた世界、これが、初めて上流貴族社会に接して抱いた清少納言の感想でした。⁽¹⁾ 周りの情景にすっかり心を奪われ、田舎者の傍観者として後宮を眺めている清少納言に、この後大変なことが起こります。女房の誰かにそのかさされた伊周が、清少納言を見つけて、すぐそばまでやってきたのです。

伊周は清少納言が隠れていた几帳をどかして正面に座ります。そして、宮仕え前に耳にした清少納言に関するうわさを持ち出して、これは本当なのかと聞いてきます。それまでの清少納言にとって、伊周ははるか遠い存在でした。見物好きの清少納言が、いつか天皇の行列を見に行った折、行列に加わっている伊周がちよつとでも彼女の乗っている車のほうに目を向けただけで、簾を引いて隙間をふさぎ、車中で扇をかざして透き影も見えないように顔を隠していたのに、今、その伊周が目の前で直接自分を見つめているのです。身の程もわきまえずにどうして宮仕えに出てきてしまったのかと、冷汗もしたり落ちる状態の清少納言。対する二十歳そこそこの大納言伊周は、清少納言が顔を隠している扇まで取りあげてしまします。しかたなく髪を振りかけて顔を隠そうとしますが、今度はまったく自信のない髪筋を見られているのが **A** たまりません。

一方の伊周は、清少納言の扇をもてあそびながら、「この絵は誰に描か

せたのだ」などと言ってなかなか返してくれません。清少納言はついに袖を顔に押し当ててその場に突っ伏してしまいました。化粧の白粉おしろいが着物に移って顔はまだらになっているにちがいないと思いつながら……。

追いつめられて身動きもできない清少納言を見兼ねて、助け船を出そうとしたのは中宮定子でした。手元にあった本を指し示して兄を自分のほうへ来させようとします。ところが伊周は、清少納言が自分を離してくれないのだとんでもない冗談を言い、さらには、清少納言が世間の書家の筆跡を全て知っているから本をこちらによこすようにと言うのです。

関白家のお坊ちゃんにからまれ、ほとほと困り果てている清少納言の様子が見えませんでした。作者自身もこの章段を書きながら、宮仕えの当初を思い出して思わずほえんだのではないのでしょうか。

初めて宮廷に出仕してから数日間の清少納言の緊張は大変なものでしたが、しばらくすると宮中の生活にもだいに慣れていきました。初宮仕えの頃を記した章段の後半に、次のようなエピソードが載っています。

物など仰せられて、「われをば思ふや」と問はせたまふ。御いらへに、「いかがは」と啓するに合はせて、台盤所の方に、鼻をいと高うひたれば、「あな心憂、そら言を言ふなりけり。よしよし」とて、奥へ入らせたまひぬ。(二七七段)

中宮様が何かお話をされたついでに、「私のこと、好きかしら」とお聞きになります。お返事として、「どうしてお慕い申しあげないことがございましょう」と、申しあげる言葉と同時に、台所のほうで誰かが大きなくしゃみをしたので、中宮様は「まあ、いやだ、お前はうそを言っ

たのね。もういいわ」とおっしゃって、奥へお入りになってしまいました。

「われをば思ふや」と清少納言に問いかける定子の自信に満ちた誇らしげな態度はどうでしょう。今を時めく唯一の中宮という立場に何の陰りもありません。こんなふうには正面切って問われた女房は何と答えたらよいのでしょうか。この時の清少納言のように、言葉少なに強調表現で答えるしかないでしょう。

ところが、その時、事件が起こりました。清少納言が言葉を発するのと同時に台所のほうで誰かが大きくくしゃみをしたのです。そこで、清少納言の返事はうそだったのかと定子は決めつけていますが、心の中では、「こんなふうには言ったら、どんな反応するかしら」とおもしろがっていたに違いありません。とても茶目っ気のある中宮様なのです。

当時、くしゃみは不吉なものとされ、人前ではなるべくしないように慎んでいたようです。現代でも風邪のひき始めなどに出ることから考えると、くしゃみは体調をくずす前兆と見られていたからかもしれません。ちなみに本来、「くしゃみをする」という言葉は、『枕草子』本文のように、「鼻くをひる」という語だったので、くしゃみをしたときに「休息くそくまん万命みよ」と唱えた呪文を早口で「くさめ」と言うようになり、それがくしゃみという言葉に変化したと言われています。

さて、清少納言はすっかり気持ちが落ち込んでしまいました。どうして、よりによって、あんなタイミングでくしゃみなんかしてくれたことだろうと、くしゃみの主が憎らしく、**B**しかたありません。でもまだ新参

者の初々しい頃だったので、何の言葉も返すことができないままに夜が明け、自分の部屋に戻りました。その直後、定子から清少納言に和歌が届けられます。

いかにしていかに知らまじいつはりを空にただすの神なかりせば

(二七七段)

いったいどうやって(お前の言葉が本当かどうか)知りましようか。

もしも天にうそをただす、^{*ただ}糺すの神がいなかったとしたら、決して知ることではできなかったでしょう。

これにはどうしても答えねば、と清少納言も返歌をしました。定子は、まだ宮仕えに十分に慣れていない清少納言に、何とか答えさせようと思っていたのかもしれませんが。

さて、二人のこの贈答歌が清少納言の初宮仕えの時期を春と考える説の根拠になっています。定子から送られた手紙が浅緑色であり、清少納言の返歌に花が詠まれているからです。それはこの章段の始まりに、⁽³⁾季節は冬ではないかと推定した⁽¹⁾ことと合いませんね。実は初宮仕えの時期については冬か春かで意見が分かれているのです。

最後の逸話は早春のことと見ていいと思います。しかし、定子と初めて出会ったところの記事は冬でいいのではないかと思います。つまり、初宮仕えを扱った一つの章段に、冬から春にかけての数か月間のできごとが記されていると見れば、季節の矛盾はなくなると私は考えています。

(赤間恵都子「歴史読み 枕草子 清少納言の挑戦状」による)

[注] 定子——藤原定子。一条天皇の皇后となり、中宮の号を得た。

清少納言が仕えていたことで知られる。

直衣——公家が平常着用するもの。

後宮——ここでは、宮中で皇后が住む場所のこと。

瞠目——目を見開くこと。

車——ここでは、当時貴族が常用していた牛車のこと。

糺すの神——京都の下鴨神社に祀られている神。偽りを正すとされる。

返歌——他人から贈られた歌に対する返事の歌。この時の清少

納言の返歌は、「薄さ濃さそれにもよらぬはなゆゑに憂き身のほどを見るぞわびしき(色の濃さ・薄さで花の美しさが決まるものですが、私の中宮様に対する思いの濃さとは関係なく誰かの鼻が発したくしゃみのおかげで、つらい思いをしているわたしの身は、やりきれません)」というものだった。

[問1] ⁽¹⁾ 周りの情景にすっかり心を奪われ、田舎者の傍観者として後宮を

眺めている清少納言に、この後大変なことが起こります。とあるが、清少納言にとって何が大変だったのか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 天皇の行列を見に行ったときに伊周から顔を隠していたという宮仕え前の行動の意図について、女房の誰かにそそのかされた伊周が、正面から聞いてきたこと。

イ 天皇の行列を見に行ったときには、行列から車のほうを見られただけ

でも顔を隠すほど遠い存在であった伊周が、近付いて自分の顔を見ようとしてきたこと。

ウ 几帳の陰に隠れていたにもかかわらず伊周に見つけられ、身の程もわきまえずに宮仕えに出てきたことについて、正面から問いつめられてしまったこと。

エ 見物好きだったことから天皇の行列を見に行った際、車の中にいる自分の姿を見ていた伊周が、そのときといまの自分の姿を見比べようとしていること。

〔問2〕 AとBに入る言葉の組み合わせとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア A 恥ずかしくて B 悔しくて

イ A 恥ずかしくて B うつとうしくて

ウ A 悲しくて B 悔しくて

エ A 悲しくて B うつとうしくて

〔問3〕 定子の自信に満ちた誇らしげな態度はどうでしょう。とあるが、

なぜ「自信に満ちた誇らしげな態度」だと筆者は判断したのか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア くしゃみで否定されたにもかかわらず、清少納言が自分を好きなことを疑っていないと、歌によって告げる余裕があると考えたから。

イ とまどわせる質問をしたうえに、その答えをあえて曲解するのは、立場を利用して清少納言に意地悪をするのが目的だと考えたから。

ウ 自分のことを好きか、などという問いは、肯定の返事が返ってくることを確信していなければ、発することができないと考えたから。

エ 大変な緊張のなかにあると知りつつ清少納言を困らせるような質問をあえてするのは、身分の違いを見せつけるためだと考えたから。

〔問4〕³⁾ 季節は冬ではないかと推定したとあるが、そのようにとらえた情景が色彩豊かに示されている部分を、本文中から二十二字でそのまま抜き出して書け。

〔問5〕 本文の内容として適切でないものを、次のうちから選べ。

ア 清少納言も伊周の姿には魅力を感じていたが、その伊周が積雪見舞いに定子のもとを訪れ和歌でやりとりをしたのを見て、清少納言は大いに驚いた。

イ 遠い存在だった伊周がなれなれしく話しかけてきたことで困り果てていた宮仕え当初の自分を、清少納言も後には懐かしく思い出したことと想像される。

ウ 定子の問いかけに対する返事と同時にくしゃみが聞こえたことで清少納言は落ち込んだが、定子は清少納言が自分を慕う気持ちを疑っていなかった。

エ 定子と清少納言がやりとりした歌の内容や紙の色を根拠にして考えるかぎり、清少納言の初宮仕えの季節を冬だとするのは誤りだと認められた。